

夜明け

キリストの臨在の使徒



『ドーンマガジン』

2026年9月号

目次

特集記事 2

神の契約に示される、人間に対する神の計画..... 2

聖書研究 16

神がヨシュアに使命を与える 16

ヨルダン川からの十二の石..... 19

太陽が静止した 22

ラハブが偵察者を隠す 25

クリスチャンの生活と教義.....28

「わたしの言葉もそうなる」 28

聖書を手元に置いて読み進めましょう！

神の契約に示される、人間に 対する神の計画

「主の秘密は、主を畏れる者たちにある。主は彼らに御自身の契約を明らかにされる。」

詩編 25:14

神には、地上のすべての氏族に祝福をもたらし、その計画が成就した時には、人類を神のもとへと回復させるといふ、人類に対する計画があります。もし私たちが、あらかじめ定めた信条を立証するためだけに聖書を研究するならば、そのページに隠された真理の宝石を見つけることは決してできないでしょう。しかし、もし私たちが神の御心を学ぶことに誠実に努め、偏見のない心と正直な心を持って聖書に接するならば、人間の運命に関する神の計画がそのページに明確に明らかにされていることに気づくでしょう。

神の契約は、時代を超えた神の栄光に満ちた計画の完全な概要を示しています。聖書に記録されているこれらの契約は、失われた楽園から取り戻された楽園に至るまで、人類の歴史の全過程を網羅しています。本記事では、聖書に記録されている神と人間との間の契約のいくつかについて論じます。これらの契約を理解することは、世界の救いという偉大な神の計画における私たちの立場を深く認識する助けとなるでしょう。人類のための神の計画が展開される中で、神の威厳ある歩みを仰

ぎ見るにつれ、私たちの信仰は深まり、神の御国への希望はより大きく、より現実的なものとなっていくでしょう。

聖書に記されている神の契約は、さまざまな形で与えられています。中には、神側による一方的な約束や誓約という形式のものもあります。また、神と個人、国家、あるいは全人類との間の双務的な合意や契約として構成されているものもあります。神の契約の中には、忠実さに対する報いと不忠実さに対する罰を定めた、神によって定められた掟が含まれているものもあります。しかし、いずれの場合においても、神が人間という被造物と結ばれる契約は、彼らに永遠の祝福をもたらすという究極の目的のために行われるものです。

エデンの契約

神と人間との間の最初の契約は、エデンの園で結ばれました。それは創世記2章15～17節に記録されています。「主なる神は、人をエデンの園に置き、それを耕し、守らせた。しかし、主なる神は彼に警告して言われた。『園にあるすべての木の実を自由に食べてよい。ただし、善悪の知識の木の実だけは食べてはならない。もしそれを食べれば、必ず死ぬ。』」

生か死かは、この契約を守るかどうかにかかっていた。それは神の律法への従順を求められていた。アダムは不従順によってこの契約を破った（創世記3章6節）。彼は神との契約関係を失い、死の宣告を受けた。聖書は、「主の恵みには命がある」と述べている。（詩編30:5）。多くの人が

「生来の不死」という誤った教義を信じているが、神の恵みなしに永遠に生きることは誰にもできない。人が命を持つのは、神の恵みの中にいるときだけである。人の永遠の存在は、神との契約関係にあるかどうかにかかっている。サタンは言った。「あなたがたは決して死ぬことはない。」（創世記 3:4）。これを現代風に言い換えれば、「あなたは死んだように見えるだろうが、実際にはあなたの魂は別の場所で生きている」ということになる。

サタンについて、イエスはこう言われました。「彼は初めから殺人者であった。彼の中には真理がないから、いつも真理を憎んできた。彼が嘘をつくのは、その本性にかなっている。彼は嘘つきであり、嘘の父だからである。」（ヨハネによる福音書 8:44）。一方、神はアダムに、不従順の結果を簡潔かつ明確に告げられました。「あなたは必ず死ぬ。」（創世記2:17）。私たちの周囲にあるあらゆる証拠から見て、真実を語っていたのはサタンではなく、神であった。確かに、アダムは死んだ。そして聖書は、アダムにおいて「すべての人が死ぬ」と教えている（創世記5:5；コリントの信徒への手紙一15:22）。したがって、私たち一人ひとは、この生と死に関わる問題において、真実を語ったのが神であったのか、それともサタンであったのかという決断に直面しなければならない。

アダムだけが神との交わりを失っただけでなく、彼の子孫もすべて、神との契約関係の外で生まれてきたことは明らかです。「一人の人によって罪

が世に入り、罪によって死が入り、こうして死がすべての人に及んだ。すべての人が罪を犯したからである。」（ローマ人への手紙 5:12）と記されています。しかし、アダムの背きの後、神は人類をサタンに引き渡して、完全に滅ぼすようなことはされませんでした。この事実は、創世記3章15節の記述によって初めて明らかにされました。そこでは、女の「子孫」が蛇の頭を砕くという確約が与えられています。これは、いつの日か将来、神との契約関係が回復される可能性があるという、私たちの最初の両親への一筋の希望の光でした。

ノアとの契約

エデンからの追放後、人間と結ばれた次の契約は、ノアに与えられたものである。この契約は、「天は主のものであり、地は主が人の子らに与えられた」という大きな確信を与えてくれる（詩編115篇16節）。この契約は、創世記9章11～17節に明確に記されている。「はい、わたしはあなたたちと契約を結ぶ。二度と大洪水がすべての生き物を滅ぼすことはない。二度と洪水が地を滅ぼすことはない。」そこで神は言われた。「わたしは、あなたと、すべての生き物との間の、後のすべての世代にわたるわたしの契約のしるしをあなたに与える。わたしは雲の中に虹を置く。それが、あなたと全地との間のわたしの契約のしるしである。わたしが雲を地の上に送るとき、虹が雲の中に現れる。そうすれば、わたしはあなたとすべての生き物との間の契約を思い出す。二度と、大洪水がすべての命を滅ぼすことはない。私が雲の中に虹を見る時、私は神と地上のすべての生き物と

の間の永遠の契約を思い出す。そこで神はノアに言われた。「そう、この虹こそが、私が地上のすべての生き物と結ぶ契約のしるしである。」

この記述において、神は虹こそが契約が守られることのしるしであり、地が二度と大洪水によって滅ぼされることはないことを私たちに告げておられます。私たちはこう問うかもしれません。「なぜ、神の契約の保証のしるしとして虹が選ばれたのでしょうか？」この単純な真理を理解することは、私たちの信仰を深めることにつながります。聖書によれば、大洪水の以前、地上に雨が降ったことは一度もありませんでした。創世記2章5節、6節には、「主なる神は、まだ地上に雨を降らせたことがなかった。……しかし、地から霧が立ち上り、地の全面を潤した。」と記されています。ノアが迫り来る大洪水に備えて箱舟を建造していた際、おそらく嘲笑された理由の一つは、当時の人々が雲から雨が降るのを見たことがなかったからでしょう。

大洪水以前に雨が降らなかった理由は、聖書的な根拠だけでなく、科学的な根拠にも基づいています。創世記1章6～10節にある 創造の記述によれば、「大空」が二つの大きな水塊を隔てていたとされています。神はその大空を「天」——すなわち、広大な空——と呼んだと記されています。天の下にある水は地上にあり、乾いた地が現れるにつれて、それらは現在私たちが目にしているのと同じように、「海」と呼ばれる巨大な水域へと分けられました。大空の上にある水は、大洪水以前、地球を取り囲む水状の物質の輪という形をと

っていました。惑星の周囲に環があることは珍しいことではありません。土星には、主に氷の形をした水で構成された環があります。他の惑星には、水以外の物質でできた環がある。大洪水以前に地球を取り囲んでいた環は、地球が人間の居住地として準備されていた時期に形成されたものである。当時、地球の激しい熱によって、膨大な量の水分が水蒸気の形で放出された。この水分はベールのように地球を取り囲み、地球上に温室のような状態をもたらした。

この地球創造説は、多くの科学者や聖書学者によって支持されている。なぜマストドンやその他の温血動物が、現在の北極圏にあたる地域で生息できたのか、多くの人々がその理由に首を傾げてきた。大洪水以前に地球上に存在した温室状態により、地球のあらゆる地域が等しく居住可能となっていたのである。

創世記7章11節、12節には、地球の上空にある「輪」が破られたことが次のように記されている。「ノアが六百歳になった年の第二の月の十七日、その日、大いなる深淵のすべての泉が裂け、天の窓が開かれた。そして、雨は四十日四十夜、地上に降り続いた。」

「天の窓が開かれた。」 大空の上にある水は、地球の引力の範囲内に入り、大洪水という形で降り注いだ。特に極地における温室効果は突然終わり、氷冠が形成された。この大洪水は、ノアに与えられた神の言葉が成就して起こったのである。マストドンやその他の動物たちは、胃や腸の中に未消化の食物を残したまま閉じ込められた。それ

らは、証しとして今日に至るまで保存されている。

今や、神がなぜ契約のしるしとして虹を選ばれたのかがわかります。もし大空の上に水があったなら、地球は太陽の直射日光を浴びることはできなかったでしょう。虹が現れるには太陽の直射日光が必要です。なぜなら、虹とは、湿気を含んだ空気に太陽の直射日光が当たって、光がプリズムのようにさまざまな色に分解される現象だからです。目に見える虹の存在は、もはや地球の上空に水の輪が存在しないことを証明しています。また、地球全体を覆うような大洪水が二度と起こり得ないことも保証しています。神が人間との契約のしるしとして虹を選ばれたのは、これほど大規模な大洪水が二度と起こり得ないという絶対的な保証だからです。

アブラハムおよびイスラエルとの契約

神は次に、アブラハムと契約を結びました。この契約は、地上のあらゆる家族に影響を及ぼします。それは、「あなた〔あなたの子孫〕によって、地上のすべての家族が祝福を受ける」という言葉に簡潔に表されています（創世記 12:3、22:18）。この契約のさまざまな詳細は、他のいくつかの機会にアブラハムに繰り返し伝えられ、またその息子イサク、そしてイサクの息子ヤコブにも伝えられました（創世記26:4; 28:14）。ここに、すべての人々への素晴らしい確約があります。なぜなら、この契約は二つのことを約束していたからです。第一に、アブラハムに子孫が与えられる

こと、第二に、アブラハムの子孫を通して、地上のすべての家族に祝福がもたらされることです。

アブラハムとの契約を結んでから**4世紀**余りが経った後、神はヤコブの**12人**の息子たちの子孫であるイスラエルの民と契約を結びました。これは「律法の契約」として知られています。この契約はシナイ山で結ばれました。神の律法の定めを与えられた後、イスラエルの民はこう告げられました。

「それゆえ、あなたがたはわたしの定めを守らなければならない。……これを守る者は、それによって生きる。」 彼らは心をつにして、「主が語られたことはすべて、私たちは行います」と答えました（レビ記 **18:5**；ローマ人への手紙 **10:5**；出エジプト記 **19:8**）。イスラエルの民は律法の契約の条件を受け入れました。彼らはこの契約の中に永遠のいのちへの道を見出したと思い、自分たちがなすべきことは、この契約の条件を守るだけだと考えていました。

神は、ガラテヤ人への手紙**4章21～28節**に記されているように、アブラハムの妻たちを通して、この二つの契約——一つはアブラハムとの契約、もう一つはイスラエルの民との契約——を象徴として示されました。「律法の下にいたいと願う人々よ、聞いてください。律法の言葉を聞いていないのですか。すなわち、『アブラハムには二人の息子があつた。一人は奴隷の女から、もう一人は自由の女から生まれた』と書いてあるからです。しかし、奴隷の女から生まれた子は肉によるものであり、自由な女から生まれた子は約束によるものでした。これらは比喻です。すなわち、これらは

二つの契約を表しています。一つはシナイ山から出たもので、奴隷の状態をもたらすものであり、それはハガルです。このハガルはアラビアにあるシナイ山であり、現在のエルサレムに対応しています。そして、その子らと共に奴隷の状態にあります。しかし、上のエルサレムは自由であり、私たちのすべての母である。なぜなら、「産むことのない不妊の女よ、喜びなさい。産みの苦しみを経験しない者よ、声を上げて叫びなさい。夫のある女よりも、荒れ果てた女の方が、はるかに多くの子供を持つからである」と書かれているからである。さて、兄弟たちよ、私たちはイサクのように、約束の子である。」

なぜ律法の契約が結ばれたのでしょうか。それはイスラエルの民を束縛下に置いてきました。しかし、イエスを除いて、それを完全に守ったユダヤ人は一人もいません。それは彼らの能力の及ばないところだったのです。律法の契約が結ばれた理由はいくつかありますが、主な理由は、パウロがガラテヤ人への手紙**3章24節**で述べている通り、「それゆえ、律法は、私たちをキリストへと導くための教育者であった」ということです。律法の契約は完全なものでした。しかし、イエスを除いて、イスラエルに与えられた律法を完全に守ったユダヤ人は一人もいません。不完全な人間が完全な律法を守ることはできません。同様に、アダムの子孫の誰も神の完全な律法を守ることはできません。なぜなら、すべての人は「不義のうちに形作られ」、罪のうちに宿ったからです（詩編**51:5**）。すべての人は不完全である。ユダヤ人たちが「いのち」のためだと考えていた律法は、実

は「死」をもたらすものであることが判明した。それは彼らを罪の下に定罪したのである（ローマ人への手紙**7:10**、ガラテヤ**3:22**）。それは、彼らが不完全であり、神の完全な律法が彼らの能力を超えていることを示したのである。

律法の契約は、ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、不完全な人間には神の律法を守ることができないことを証明しました。「それゆえ、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り、こうして死がすべての人に及んだのは、すべての人が罪を犯したからです。」（ローマ人への手紙**5:12**）。したがって、前述の通り、律法の契約は、人類の救い主であり贖い主であるキリストへと導く「教師」であった。私たちの主イエスは、「聖く、無邪気で、汚れがなく、の罪人たちとは隔てられた方」であった（ヘブライ人への手紙**7:26**）。主は神の律法を全うされた。これは、人間としての主の完全さを示し、それゆえ、アダムとその子孫のための身代金として死なれる能力を証明したのである。

神の正義の律法によれば、失われた完全な命の代償として、完全な命が捧げられなければならなかった（出エジプト記**21:23**）。アダムは罪によって完全な命を失った。彼は死に、全人類は彼の中で死んだのである。完全な人であるキリストは、神の律法に従順であった。キリストは罪人としてではなく、罪人であるアダムの代わりに死なれた。神の力強い御力によるキリストの復活は、全人類がキリストのうちに生きるという確信を私たちに与えてくれる。（使徒言行録**17:31**）「アダムにお

いてすべての人が死ぬのと同様に、キリストにおいてすべての人が生かされる」のであり、エデンの園で失われた人間の完全さへと回復される機会が与えられるのである。（コリントの信徒への手紙一 15:22）。律法の契約は、救い主と贖い主の必要性を示すために与えられた。キリスト・イエスを通して、全人類は再び、いのちと神との交わりの特権を得るようになる。

「子孫」の展開

アブラハムとの契約は、地上のすべての氏族が祝福される「子孫」について語っていました。旧約聖書に記録されている出来事は、イサクもヤコブも、全人類に祝福をもたらすことのできる、その「子孫」ではなかったことを示しています。新約聖書は、その「子孫」がキリストであったと教えています。「さて、約束はアブラハムとその子孫に対してなされたのです。神は『子孫たち』とは、多くの者を指して言われたのではなく、ただ一人を指して、『あなたの子孫』、すなわちキリストを言われたのです。」（ガラテヤ人への手紙 3:16）。アブラハムの子孫であるキリストは、契約に従って地上のすべての氏族を祝福することになっています。キリストは、神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれ、約束された祝福の成就を近づけてくださいました。「」（ヘブライ人への手紙 2:9）。神の計画は、行き当たりばったりのものではありません。それは、正義、知恵、愛、そして力の原則に基づいています。なぜなら、神のすべての属性が、人間に対する神の計

画の調和のとれた成就の中に結集しているからです。

主が誕生されたとき、天使はこう言いました。

「恐れることはない。見よ、わたしは、すべての民に大きな喜びをもたらす良い知らせを告げ知らせる。今日、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方は、主キリストである。」すると、天の軍勢はこう宣言しました。「いと高きところには神に栄光があり、地には平和、人々に善意がある。」（ルカによる福音書 2:10,11,14）。キリストがカルバリで亡くなってからほぼ二千年が経過したが、約束された祝福はまだ地上に訪れていない。これには理由がある。それは、福音の教会を、世界を祝福する「子孫」としてキリストと共に共同相続人とする契約に見出される。多くの人に見過ごされているこの偉大な真理は、それがもたらす展望によってクリスチャンを奮い立たせるはずである。「あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つである。もしあなたがたがキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人である。」ガラテヤ人への手紙 3:28,29

ペンテコステ以降のこの時代の働きは、世の回心ではありませんでした。世は神と和解したわけではありません。むしろ、この時代は、キリストとキリストに属する者たちを含む、アブラハムの「子孫」の発展を目の当たりにしてきました。今日、真のクリスチャンには、「暗やみから、その驚くべき光の中へ」と私たちを招いてくださった

方の「栄光を現す」という特権が与えられています。ペテロの手紙第一 2:9

新しい契約

時が満ちれば、忠実な教会はキリストと共に千年間生き、支配することになる。（ヨハネの黙示録 20:4,6）。それによって、神の約束に従い、地上のすべての家族を祝福する働きが始まる。これが新しい契約の働きとなる。エレミヤ書 31:31-34 とヘブライ人への手紙 8:8-12 は、この契約と、地上のすべての家族にもたらされるその祝福された結果を予言している：「わたしは、わたしの律法を彼らの内に置き、それを彼らの心に書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。もはや、人は隣人に対して、『主を知れ』と教えることも、兄弟に対して、『主を知れ』と教えることもない。なぜなら、彼らの中で、最も小さい者から最も大きい者まで、皆、わたしを知るようになるからだ。主はこう言われる。わたしは彼らの不義を赦し、彼らの罪を二度と覚えはしない。」

ここには、人間が神との契約関係に再び導かれるという確約があります。この約束は成就され、その千年の治世の間に、神の律法は再び人々の心と魂に刻まれるでしょう。すべての敵はキリストの足の下に置かれ、最後の敵である死は滅ぼされるのです。（コリントの信徒への手紙一 15:25,26）。故意に不従順な者だけが、死によって断たれることになる。使徒言行録 3:23

地上のすべての自発的で従順な人々は、礼拝のためにひざまずき、すべての舌が「イエス・キリストが主であることを、父なる神の栄光のために」告白するでしょう。（フィリピ人への手紙

2:11）。 私たちは、神が人類の回復、そう、新しい契約のもとで地のすべての家族を祝福するための計画をお持ちであることを喜びます！この計画は、使徒が「時の満ちる時の計画」と表現する時にその頂点に達し、その時、神は「天にあるものも地にあるものも、すべてキリストのうちに一つにまとめられる」のです。（エペソ人への手紙 1:10）

9月6日のレッスン

神がヨシュアに使命を与える

「わたしのしもべモーセは死んだ。さあ、立ち上がって、あなたとこの民すべてとで、このヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの子らに与える地へ行きなさい。」

ヨシュア記 1:2

選読箇所

ヨシュア記 1:1-11

指導者の座が引き継がれた。イスラエルがこれまでに知った同族の中で最も偉大な指導者であったモーセは、亡くなっていた。彼の死により、イスラエルの民の間には巨大な権力の空白が生じる可能性があった。自らの死が迫っていることを十分に自覚していたモーセは、先手を打ってヨシュア記に手を置き、彼をイスラエルの指導者に任命した。（申命記 34:9）。ヨシュアは、この新たな役割を引き受けることに圧倒されたかもしれない。どうして自分がモーセのような指導者になれるだろうか。主がヨシュアに与えた最初の助言は、ヨシュアの不安を察しているように思われる。

主がヨシュア記に与えた就任のメッセージの中で、「強く、勇気を持ちなさい」というテーマが三度、力強く繰り返されています。そこにはこう記されています。「強く、勇気を持ちなさい。あなたが、この民を率いて、わたしが彼らの先祖に

与えると誓ったすべての地を、彼らに受け継がせる者だからです。強く、大いに勇気を持ちなさい。モーセがあなたに与えたすべての命令に、注意深く従いなさい。それらから右にも左にも逸れてはなりません。そうすれば、あなたがたが行うすべてのことに成功する。この『 』の教えの書を絶えず読み、昼も夜もそれを深く考え、そこに書かれているすべてのことを確実に守るようにしなさい。そうして初めて、あなたがたは繁栄し、行うすべてのことに成功する。これがわたしの命令である——強く、勇気を持て！ 恐れてはならない。気落ちしてはならない。あなたがたが行くところどこにでも、あなたがたの神、主は共におられるからだ。」ヨシュア記 1:6-9

振り返ってみると、モーセ自身も指導者という役割を躊躇していたことを思い出す。「私はいったい何者なのか。どうしてファラオのもとへ行けるというのか」（出エジプト記 3:11）。また、次のように記されている。「そこでモーセは主に言った。『主よ、私は言葉が得意ではありません。昔からそうでしたし、今だってそうです。たとえあなたが私に語ってくださったとしても。』 私は口ごもりがちで、言葉がもつれてしまうのです。」主は答えられた。「さあ、行きなさい。あなたが話すとき、わたしはあなたと共にいて、何を言うべきかを教えよう。」しかし、モーセは再び懇願した。「主よ、どうか！ 他の誰かをお遣わしてください。」すると、主はモーセに怒りを示された。「よし、」と主は言われた。「あなたの兄弟、レビ人アロンはどうだ。彼は口が達者だと知っている。 彼に語りかけ、その口に言葉を授

けなさい。あなたがた二人が語る時、わたしが共にいて、何をすべきかを二人に示そう。アロンは民に対するあなたの代弁者となる。彼があなたの代弁者となり、あなたは彼のために神の代わりに立ち、彼に何を言うべきかを告げるのだ。」出エジプト記 4:10-16

主は、モーセがその役割を果たすために必要なすべてのものを備えてくださいました。主はヨシュア記と共にいて、彼の必要をすべて満たしてくださいましょう。クリスチャンとして、私たちは「神は、キリスト・イエスにある栄光の富にふさわしく、あなたがたのあらゆる必要を満たしてください」と信じるようになりました。（ピリピ人への手紙 4:19）。私たちは、主とその御業にふさわしく仕えるには自分には力不足だと感じていませんか。私たちの傷ついた肉の弱さが、主の御心を行う妨げになっていませんか。パウロに与えられた神の約束を思い起こしましょう。「『わたしの恵みは、あなたに十分である。わたしの力は、弱さの中でこそ完全に現れる。それゆえ、むしろ、キリストの力が私の上に留まるために、私は喜んで自分の弱さを誇りとする。』」コリントの信徒への手紙第二 12:9

私たちの神、主が御業のために奉仕へと召してくださる時、萎縮したり、氣力を失ったりしてはなりません。主がヨシュア記に語られた言葉を思い起こしましょう。「強くあれ、勇気を失うな。……あなたの神、主は、あなたがどこへ行っても、あなたと共におられるからである。」

ヨルダン川からの十二の石

「民の中から十二人の男、すなわち各部族から一人ずつを選び出し、彼らに命じて言え。『ここから、すなわちヨルダン川の真ん中、祭司たちの足がしっかりと立っていた場所から、十二個の石を取りなさい。それをあなたがたは持ち帰り、今夜泊まる宿営地に置いておきなさい。』」

ヨシュア記 4:2,3

選読聖句

ヨシュア記 4:1-24

ついにイスラエルは約束の地に入ろうとしていた。神によって定められた四十年にわたる荒野の放浪に耐え抜いた民は、ヨルダン川の向こうに、希望と夢の伝説の地を目の当たりにしていた。彼らはどうやって川を渡ればよいのか。橋は存在しなかった。彼らを運ぶ渡し船もなかった。しかし、川を渡る手段はあった——それは、神の奇跡的な御業によってもたらされたものだった！

ヨシュア記は、契約の箱を肩に担ぐ祭司たちが、民を率いてヨルダン川を渡らなければならないと命じられた。祭司たちは、民より2,000キュビット先に行くことになっていた。「全地の主である主の契約の箱を運ぶ祭司たちの足の裏がヨルダン川の水に触れるとき、ヨルダン川の水は流れを止め、上流から流れ下る水は一つの塊となって立ち止まるであろう。そこで、民が天幕を出てヨルダ

ン川を渡ろうとしたとき、契約の箱を運ぶ祭司たちが民の先頭に立ち、箱を運ぶ者たちがヨルダン川にたどり着き、箱を運ぶ祭司たちの足が水際につかったやいなや、…… 上流から流れ下る水は、ザレタンに隣接する町アダムという場所で、はるか遠くに一か所に立ち止まり、アラバの海、すなわち塩の海に向かって流れ下る水は、完全に断たれた。民はエリコの向かい側を渡った。主の契約の箱を運ぶ祭司たちは、ヨルダン川の真ん中の乾いた地にしっかりと立ち、イスラエルの全軍が乾いた地を歩いて渡り、国民全員がヨルダン川を渡り終えるまで、その状態が続いた。」ヨシュア記 3:13-17

この偉大な出来事を記念するために、各部族から一人ずつ選ばれた十二人の男たちが、川底から十二個の石を取り出し、記念碑とした。それらの石は、イスラエルが最初に宿営した場所に置かれた。ヨシュアは自らその石を取り、この出来事を記念して記念碑を築いた。それは、神の民のために神が示された御力を、永続的かつ重要な形で思い起こさせるものとなった。（ヨシュア記 4:4-9）数世紀後、別の神のしもべもまた、石の記念碑を建てた。「そこでサムエルは石を一つ取り、ミズパとシェンの間に立て、その名をエベネゼルと名付け、『主はここまで私たちを助けてくださった』と言った。」（サムエル記上 7:12）。私たちがまた、人生において神が備え、助けてくださったそのような注目すべき出来事を「エベネゼル」として記念するよう導かれている。

象徴的に言えば、クリスチャンとして私たちはイスラエルがしたようにすることができます。個人的な混乱の時や、困難の波に押し流されそうになる瞬間にも、主の助けは私たちと共にあります。神の確かな約束が私たちを支えてくださいます。主の誠実さを思い起こすために、私たち自身の記念の石、すなわち「エベネゼル」を立てましょう。

太陽が静止した

「主が人の声に耳を傾けられたような日は、その前にも後にもなかった。主がイスラエルのために戦われたからである。」

ヨシュア記 10:14

選読聖句

ヨシュア記 10:1-15

この聖書の箇所では語られている驚くべき日は、長きにわたり多くの驚嘆と議論の的となってきました。ヨシュア記とイスラエルの軍勢は、新たな同盟者であるギベオン人を守るためにやって来ました。攻撃側はアモリ人の五人の王たちで構成されていました。彼らはギベオンを滅ぼすために結束していたのです。どうやら彼らは、「もしギベオンがイスラエルの強大な力と手を組んで、我々を打ち負かしたらどうなるだろうか」と考えたようです。彼らの誤算は愚行へと変わり、敗北を招きました。

「ギベオンの人々は、ギルガルの陣営にいるヨシュア記に使いを送って言った。『あなたのしもべたちを見捨てないでください。急いで私たちのもとに来てください。私たちを救い、助けてください。アモリ人のすべての王たちが……私たちに敵対して集結しているからです。』そこでヨシュアは、ギルガルから、彼自身と彼と共にいるすべての戦士、そしてすべての勇士たちを率いて上った

。」（ヨシュア記 10:6,7）ヨシュアが率いた軍勢は強大ではあったが、戦いに勝利をもたらしたのは、アモリ人に対して主がなされた御業であった。

「主はヨシュア記に言われた。『彼らを恐れてはならない。わたしは彼らをあなたの手に渡した。彼らのうち、あなたの前に立ち向かう者は一人もない。』そこでヨシュア記は、ギルガル（ ）から一晩中行軍して、彼らに不意を突いて襲いかかった。こうして主はイスラエルの前で彼らを打ち破り、ギベオンで大虐殺を加えて彼らを殺した……そして、彼らがイスラエルの前から逃げ去ろうとしたとき……主は天から大きな雹を彼らに降らせ……彼らは死んだ。雹によって死んだ者の数は、イスラエルの子らが剣で殺した者の数よりも多かった。」ヨシュア記 10:8-11

以上の記述から、次の重要な事実が読み取れる。主は、アモリ人の誰一人としてヨシュア記の前に立ち向かえないよう仕組まれていた。勝利はあらかじめ約束されていたのである。アモリ人の軍勢を打ち破ったのは主であった。最後に、主はアモリ人の上に大きな雹を降らせ、イスラエルが剣で殺した者よりも多くの者を殺された。

戦いの状況を想像してみてください。それは真昼に行われた戦いではありませんでした。むしろ、その一帯を覆い、雹の源となっていた暗い嵐の雲によって、太陽と昇りつつあった月は覆い隠されていました。聖書にはこう記されています。「主がアモリ人をイスラエルの子らの前に引き渡されたその日、ヨシュア記は主に向かって語り、イス

ラエルの民の目の前でこう言った。『太陽よ、ギベオンの上にとどまれ。月よ、アイヤロンの谷にとどまれ。』そこで、太陽は立ち止まり、月も止まり、民が敵に復讐を成し遂げるまで、その状態が続いた。」（ヨシュア記 10:12,13）。太陽は見えなかったのだから、ヨシュアが文字通り空に太陽を止まるよう求めていたとは考えにくい。では、これらの聖句をどのように説明すればよいのだろうか。

「止まる」という言葉の定義が、その答えのヒントとなります。ストロングのヘブライ語辞典では、「止まる」と訳されたこの言葉を、「黙る；……止まる；また、滅びる」と定義しています。ヨシュア記では太陽に文字通り止まってほしかったのではなく、沈黙を保つか、あるいは止むことを望んでいたのです。つまり、彼は、アモリ人の敵が完全に打ち負かされるまで、天からの雹の嵐が続き（ ）、太陽を覆い隠し続けてほしいと願ったのです。

その日は、日照時間が長かったからではなく、まさにこの「鍵となる聖句」に述べられている理由によって、驚くべき日となったのです。主が人の声に耳を傾け、イスラエルに勝利を与えてくださったという点において、それは驚くべき日だったのです！

ラハブが偵察者を隠す

「これらのことを聞くやいなや、私たちの心は溶けてしまいました。あなた方のゆえに、もはや誰の心にも勇気は残っていませんでした。あなたの神、主こそ、天の上にも地の下にもおられる神だからです。」

ヨシュア記 2:11

選りすぐりの聖句

ヨシュア記 2:1-24; 6:17

ラハブには、興味深くも矛盾したさまざまな性格的特徴が見られます。聖書では娼婦と記されているラハブですが、同時に並外れた高潔さも示しました。彼女は約束を守る女性である一方で、歴史上最も巧みな嘘つきの一人でもありました。彼女は異邦人であり、イスラエルに与えられた契約や約束とは無縁の部外者でありながら、彼らの神——エホバ——を畏敬していた。彼女は、イスラエルの民に対する主の神の恵みに関する様々な報告を通じて、主のことを聞いていた。この出来事の40年前に起きた紅海の割れ目は、明らかにその地の民の間で今も語り継がれていた。

ラハブは、エリコの状況を調査するために派遣された偵察隊に、非常に有益な情報を提供した。彼女は男たちにこう言った。「主があなたがたにこの地をお与えになったこと、あなたがたへの恐怖

が私たちに降りかかっていること、そしてこの地のすべての住民があなたがたのために氣力を失っていることを、私は知っています。『あなたがたがエジプトから出てきたとき、主があなたがたのために紅海の水を干上がらせられたこと、また、ヨルダン川の向こう側にいたアモリ人の二人の王、シホンとオグに対して、あなたがたが なことを行い、彼らを完全に滅ぼされたことを、私たちは聞いたからです。』ヨシュア記 2:9,10

ラハブのこの言葉は、主がモーセに語られた御言葉、「今日、わたしは、天の下すべての国々に、あなたがたに対する恐怖と恐れを植え付け始める。彼らはあなたがたのことを聞き、あなたがたのために震え、苦悩するであろう」（申命記 2:25）。エリコを含む諸国は、イスラエルを恐れ、戦慄していた。ラハブは恐れを抱くのではなく、唯一真の神の力と威厳を受け入れたのである！これは彼女による信仰の行為であった。神を信じて震える者もいれば、神を信じて喜ぶ者もいる。（ヤコブの手紙 2:19）。ラハブは信仰の中で喜んだ。新約聖書はこのことを記念している。「信仰によって、娼婦ラハブは、偵察者たちを平和のうちに迎え入れたとき、不信仰な者たちと共に滅びることはなかった。」（ヘブライ人への手紙 11:31）。彼女の信仰は、神の民のために行動へとつながりました。「娼婦ラハブもまた、使者たちを迎え入れ、別の道から送り出したとき、行いによって義と認められたのではないのか。」ヤコブの手紙 2:25

ラハブの行いは、行動の原動力となった彼女の信仰の深さを証明しました。それは、伝説や当時の噂話に対する一過性の興味ではなく、現実のものでした。実際、彼女の信仰はそれほど現実的なものであったため、ラハブは神の計画において驚くべき役割を任されるという栄誉に浴しました。「ヨシュア記は、娼婦ラハブと、彼女の父の家族、そして彼女の所有するすべてのものを生かしておいた。彼女は、ヨシュアがエリコを偵察するために遣わした使者を隠したため、今日に至るまでイスラエルに住んでいる。」（ヨシュア記 6:25）。しかし、それだけではありません。聖書の記録によれば、「サルモンはラハブとの間にボアズをもうけ、ボアズはルツ記との間にオベドをもうけ、オベドは イッサイをもうけ、イッサイはダビデ王をもうけた。」マタイによる福音書 1:5,6

イスラエルの王ダビデは、私たちの主イエス・キリストの先祖でした。ここから得られる教訓は——単純な信仰の行いが、豊かで力強い結果をもたらすことがあるということです！

「わたしの言葉もそうなる」

「天から降る雨や雪は、地を潤し、芽を出させ、実らせ、種を蒔く者のために種を、食べる者のためにパンをもたらしまで、天に返ることはない。それと同じように、わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくわたしのもとに戻ることはなく、わたしの望むことを成し遂げ、わたしがそれを遣わした目的を必ず果たす。」

イザヤ書 55:10,11

神の御言葉は、罪の呪いを受け、滅びゆく人類を和解へと導く神の計画を明らかにしています。この聖句は、神の御旨が決して失敗することはない、神が御言葉によって語られたことを必ず成し遂げてくださるという、祝福に満ちた確信を私たちに与えてくれます。これは、私たちが初めて神の栄光に満ちた計画を知る際に学ぶ重要な教訓の一つです。このように確信を持てることは、なんと祝福されたことでしょうか！それは私たちに信仰の確固たる土台を与え、福音の中に示された希望に喜びを見出すことを可能にしてくれます。

この聖句は、神が御言葉を通して明らかにされた愛に満ちた御計画を、恵み深く成し遂げようとしておられ、またそれを成し遂げる十分な力をお持ちであるという確信をもって私たちに慰めるだけでなく、御言葉そのものが果たすべき役割を持っていることも示しています。これもまた、神の御計画に従って効果的に成し遂げられるのです。使

徒パウロは、神の御言葉が「生きた」、すなわち生けるものであり、「力強い」、すなわち「両刃の剣」よりも鋭いものであると私たちに保証しています。（ヘブル人への手紙 4:12）。神の御言葉は神の計画を明らかにします。また、神はその計画の多くを成し遂げるために御言葉を用いられます。これは、神に奉献された人々の心と人生において、神の御心が に実現されることに関して、特に当てはまります。 この点に関連して、もし私たちが神の御言葉の影響に無条件に身を委ねれば、それによって聖別され、「光にある聖徒たちの相続分にあずかるにふさわしい者」とされることを悟ることは、なんと祝福されたことでしょうか。コロサイ人への手紙 1:12

私たちの足の灯

詩編の作者は、神の御言葉が自分の足のための灯であり、自分の道の光であると記しました（詩編 119:105）。また、彼はこうも記しています。「あなたの御言葉の教えは光を放ち、それゆえ、愚かな者でも理解することができるのです」（詩編 119:130）。 私たちも、この啓示をどれほど必要としていることでしょうか！この世の人々は闇に包まれています。神は御言葉によって私たちに光、すなわち「神の栄光を知る光」（コリントの信徒への手紙二 4:6）を与えてくださいます。パウロは、この光が福音によって「私たちの心に輝いた」と述べており、私たちは今もなお闇に包まれた世界の中にいるものの、今や進むべき道を見出すことができるのです。

光は知識と理解の象徴であり、主がその御言葉を通して私たちに与えてくださった理解は、なんと素晴らしいことでしょう。私たちは、自分自身のためにも、また世界のためにも、神の計画を知るという祝福を受けています。狭い道を日々歩む中で、私たちの歩みは御言葉によって導かれています。その指針が私たちを正しい道へと導いてくれると信頼することができます——ただし、それを誠実かつ謙虚に実践するならば、ですが。 ヤコブはこう記しています。「もし、あなたがたのうち、知恵に欠けている人がいれば、すべての人に惜しみなく与え、非難することのない神に願い求めなさい。そうすれば、与えられます。」（ヤコブの手紙 1:5）。神は御言葉を通して、知恵を求める私たちの祈りに答えてくださいます。もし私たちがこの知恵を熱心に求めれば、私たちの道は「完全な日へと向かって、ますます輝きを増す光」のようになるでしょう。箴言 4:18

私たちは御言葉によって養われる

神の御言葉は、食物にも例えられています。それは、キリスト・イエスにある「新しい被造物」である私たち一人ひとりを養ってくれるからです（コリントの信徒への手紙二 5:17）。私たちが御言葉を糧とするにつれて、「主と、その力強い御力によって強められる」ようになります。（エペソ人への手紙 6:10）。この霊的な糧を通して、私たちはキリスト・イエスにある霊的な成熟の身丈へと成長していきます。イエスはモーセの言葉を引用して、敵対者に対してこう言われました。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る

すべての言葉によって生きる。」マタイによる福音書 4:4 ; 申命記 8:3

イエスは、現在の時代の終わりとご自身の再臨の時に関する約束の一つの中で、神の御言葉を「糧」として言及されました。イエスは弟子たちに、ご自身が戻られた時には「腰に帯を締め」、信仰の家族に「時宜にかなった糧」を供すると告げられました。（ルカによる福音書12:37 ; マタイによる福音書24:45）。この約束の成就を通して、私たちが享受してきた真理の饗宴は、なんと豊かなものであったことか。それはすべて神の御言葉——神の口から発せられたもの——そのものである。

清涼をもたらす水

神の御言葉は、水にも例えられています。それは清涼感を与え、活力を与え、命を与えるものです。真理の清涼な水なしに、私たちの生活はどれほど乾ききった、砂漠のようなものになってしまうことでしょう。私たちは、「義に飢え渴く」者たちに、霊的な食物と飲み物が豊かに与えられるという、主から与えられた確信に喜びます。（マタイによる福音書5:6）。イエスは、そのような人々が「満たされる」と約束されました。これは真実であることが証明されています。真理の御言葉は、なんと清々しく、そして満たされるものであったことでしょう。

さらに、神の御言葉は、私たちの生活において清める力を持つことから、水に例えられています。パウロは、私たちが「御言葉による水の洗い」に

よって清められることについて記しています。（エペソ5:26）。神の御言葉のこの働きは、イスラエルの幕屋を取り囲む中庭にあった水盤の水によって予表されていました。そこで祭司たちは身を清めましたが、私たち、すなわち将来の「王なる祭司」にとって、御言葉は、墮落した肉の過ちや汚れから清められる場なのです。1ペテロ2:9

守りの鎧

「主の真実は、あなたの盾となり、防具となる」と詩編の作者は記しています。（詩編91:4）。クリスチャンとして、私たちは一人ひとりが「イエス・キリストの兵士」です。（テモテへの手紙第二2:3）。私たちは「信仰の善戦」を戦っています。

（テモテへの手紙第一 6:12）。兵士には戦いを挑んでくる敵がいますが、私たちの敵は、この世、肉、そして悪魔です。これらの敵に対して、神の言葉は、難攻不落の防護の鎧のようなものです。サタンと、彼と結託する目に見えない勢力は特に強力であり、パウロは、これらに「立ち向かう」ためには、「神の全武装を身に着ける」必要があると教えています。（エフェソの信徒への手紙 6:11）

パウロはこの鎧の各部分を挙げ、それらがどのようにして「悪しき者の放つ火の矢」すべてから私たちを守るかを示しています（エペソ人への手紙 6:16）。そこには「救いの兜」があります（エペソ人への手紙 6:17）。これは、真理に対する私たちの知識をよく表しています。敵と戦うためには、神の御言葉を知ることが不可欠です。イエスが荒野を去ろうとしたとき、サタンがイエスを襲った

際、イエスを守ったのは、神の御言葉に対する知識でした。誘惑というあらゆる火の矢に対して、主の防御は「聖書にこう書いてある」という言葉でした。（マタイによる福音書 4:4,7,10）。ですから、私たちがイエス・キリストの立派な兵士となるためには、私たちも同様にしなければならないのです。

クリスチャンの武具のもう一つの部分は、「義の胸当て」です（エペソ人への手紙 6:14）。古代の鎧の胸当ては、心臓やその他の重要な臓器を守るために設計されていました。聖書には、「心を尽くしてあなたの心を守りなさい。それから、いのちの泉が湧き出るからです」（箴言4:23）。主は、私たちの墮落した肉体が持つ、本意ではない不完全さに基づいて私たちを裁かれるのではないことを私たちは知っていますが、敵はこの点を利用して私たちを落胆させようと努めます。敵は、私たちが神の義の基準には常に遠く及ばないのだから、主に喜ばれようと努力してもほとんど意味がないと信じ込ませようとするのです。しかし、この点においても御言葉は私たちを守ってくれます。なぜなら、御言葉は、キリストを通して天の父が愛をもって備えてくださったことを保証し、私たちの義の立場、すなわち義認は、私たち自身にあるのではなく、キリストにあると教えてくれるからです。ローマ人への手紙5章1節

その結果、敵が落胆という燃えるような矢を放っても、それは私たちを傷つけることはできません。なぜなら、私たちは御言葉の守りの確約を覚えているからです。そこにはこう宣言されています

。「神の選ばれた者たちを、誰が告発できるでしょうか。義と認めてくださる方は神ご自身です。
「誰が非難するだろうか。キリストが死なれたばかりか、むしろ復活され、今や神の右におられ、私たちのために執り成してくださっている方である。」ローマ人への手紙 8:33,34

パウロは、サタンのすべての燃えるような矢を消し去るために設計されたキリスト者の武具の一部として、「信仰の盾」について言及しています（エペソ人への手紙 6:16）。それは「かつて聖徒たちに伝えられた信仰」です（ユダの手紙 1:3）。しかし、この信仰について単に知識を持っているだけでは不十分です。私たちは、それに対して完全な確信と信頼を持たなければなりません。したがって、「信仰の盾」という象徴には、神の「尊い約束」（ペテロの手紙第二 1:4）に対する私たちの信仰も含まれています。神の摂理が私たちの生活の中でどのように働いているかを含め、神の計画と目的に対する完全な確信は、新しい被造物である私たちを滅ぼそうとするサタンのあらゆる企みに対する強固な防壁となります。

また、「御霊の剣、すなわち神の言葉」もあります。（エペソ人への手紙 6:17）。これは私たちの武具のうち、攻撃的な部分です。これをもって私たちは敵と戦いますが、それは肉的な剣ではありません。パウロは、私たちの戦いの武器はどれも肉的なものではなく、「神によって力強く、要塞を打ち壊し、……神の知識に逆らって高ぶるあらゆるものを打ち砕く」ものであると述べています。コリント人への手紙第二 10:4,5

サタンの燃えるような矢とは、キリストのからだの肢体に対する神の御心に反するささやきのことである。これらはしばしば非常にもっともなように見え、神の明示された御心よりも、常に肉にとってより魅力的なものである。もし私たちがこれらを受け入れ、それに支配されてしまえば、新しい被造物である私たちに深刻な傷を負うことになります。しかし、「御霊の剣」を振るってそれらのささやきを撃退し、打ち砕くならば、敵とのあらゆる小競り合いを勝利のうちに乗り越えることができるでしょう。

狭い道を歩む私たちの歩みも、御言葉によって守られています。パウロは、私たちの足が「平和の福音の準備を履き」と述べています（エペソ人への手紙 6:15）。クリスチャンの道は、しばしば陰しく困難です。敵は、私たちが躓いて倒れるようなつまずきの石を置きます。御言葉はまた、「鳥捕りのわな」についても語っています。（詩編 91:3）。私たちの足を守るものは「平和の福音」と呼ばれています。これは、サタンの攻撃手法の一つが、私たちを、敵対する者たちとの肉적인争いや論争へと誘い込むことであることを示しています。そのような道は肉にとっては魅力的に見えるかもしれませんが、新しい被造物にとっては罠であり、つまずきの石なのです。「平和をつくる者は幸いである」と御言葉は告げ、「彼らは神の子と呼ばれるからである」とあります。マタイによる福音書5:9

パウロは、「真理をもって腰に帯を締めなさい」と述べています（エペソ人への手紙 6:14）。古代

における腰帯の機能は、現代のベルトに例えることができます。これは、奉仕の適切な象徴であることを示唆しています。真理の御言葉が持つ保護的な性質は、私たちがそれを利己的ではなく、愛をもって保持しているかどうかにかかっています。言い換えれば、私たちは、与えられた真理の忠実な僕でなければならぬのです。その恵みをも自分たちだけで享受するのではなく、他者の祝福のために忠実に用いるべきです。そうでなければ、「神の全武具」は私たちにしっかりと身に着いたままではいられず、遅かれ早かれ敵の前に倒れてしまうでしょう。

神の御言葉のしもべたち

主は冒頭の聖句において、御口から発せられる御言葉が、空しく御自身のもとへ戻ることはない、と私たちに確約してくださっています。主が御自分の民を、御自身の真理のしもべとして用いておられることを覚えておくことが重要です。神は天の御座から御言葉を叫び下ろすのではなく、人間の器を通して、御民の心と精神にそれを伝えられます。神は古代の預言者たちに靈感を与え、旧約聖書に御計画を記させました。また、イエスの教えを導かれました。聖霊は奇跡的に使徒たちの心を照らし、彼らの説教や著作が、神の口から発せられる御言葉をさらに詳しく解き明かす役割を果たすようにされたのです。

パウロは、奇跡的に靈感を受けた「御言葉の奉仕者」に加え、主はまた、牧師、教師、伝道者をも備えてくださったと説明しています（エペソ人への手紙 4:11）。さらに広い意味では、神に奉獻さ

れたすべての神の子は、神の真理の僕である。なぜなら、「主なる神の御霊」が彼らすべての上にあり、この奉仕のために彼らに油を注いでいるからである（イザヤ書 61:1、ルカによる福音書 4:18、ヨハネの手紙一 2:27）。神の御言葉によって概説されている偉大な救いの計画とは、罪の呪いを受け、死に向かっている人類を神と和解させることである。この計画の中心は、贖い主であり救い主であるキリスト・イエスにある。パウロは、「神はキリストのうちにあって、世をご自身と和解させてくださった」と記し、さらにこの偉大な計画において、私たちは「キリストの使節」であると付け加えている。キリストの使節として仕えるために、主は私たちに「和解の言葉」を与えてくださった。（コリントの信徒への手紙二 5:19,20）

種を蒔く人のたとえ

神が、これほど脆弱で不完全な僕たちを、御言葉を伝える器として用いてくださるというのは、ほとんど理解しがたいことです。しかし、神の御言葉は空しく神のもとに戻ることなく、神の御心にかなうことを成し遂げ、神が遣わされた目的において実を結ぶと、神ご自身が告げてくださることは、実に心強い慰めです。私たちはこれを喜びますが、神の権威によって御言葉を宣べ伝えるとき、その結果は乏しいように見えるかもしれません。実際、しばしば、結果が全くないように思えることさえあります。しかし、神の御言葉は、私たちを励ますためにこのことについても説明しており、私たちの有限な知性からは努力が無駄に思え

ても、神の御言葉は神の善き御旨を確かに成し遂げることを示しています。

この説明は、イエスの「種を蒔く人のたとえ」に見られます（マタイによる福音書 13:3-8,18-23）。このたとえ話における種とは、「御国の言葉」、すなわち神の御言葉のことです。それは、人類を神ご自身と和解させるための神の偉大な計画です。それは、神の御国が到来し（ ）、天におけるように地においても神の御心が成される時、その栄光に満ちた完成を迎える計画なのです。この種を蒔く人は、主に奉獻され、御霊によって生まれたすべての人々を表しています。神はこうした人々にこう語られます。「朝は種を蒔き、夕べも手を休めてはならない。どれが実を結ぶか、これかあれか、あるいは両方が等しく良くなるか、あなたには分からないからである。」（伝道の書 11:6）

このたとえ話では、蒔かれた種の一部は道端に落ち、鳥に持ち去られ、一部は土の浅い岩だらけの地に落ち、一部は茨の中に落ち、そして一部は良い地に落ちます。良い土に落ちたものだけが、成熟した「実」を結ぶのです。私たちが真理を宣べ伝えても、一見結果が出ていないように見えるとき、このたとえ話を思い起こせば、落胆することはないでしょう。これは、イエスがご自身の民の努力の多くが、一見無駄に思えることをあらかじめ知っておられたことを示しています。

しかし、私たちの努力がしばしば無駄に思えるとしても、神の御言葉は空しく神のもとへ戻ることはないというのは事実です。神は御言葉を広めるために私たちの助けを必要とされません。神が私

たちにこの特権を与えてくださったのは、私たちがそれを忠実に用いることによって、私たち自身が霊的に豊かになり、強められるためなのです。預言者はこう記しています。「ある人は惜しみなく与えるが、かえってさらに多くを得る。またある人は不当にけちるが、結局は貧しくなる。」（箴言 11:24）。神は、他者がそれをどのように受け止めるかに関わらず、真理の種を蒔くことを私たちに求めておられます。そうすることで、その命を与える力が私たち自身の生活の中で増し加わるからです。これこそが、真理の御言葉を私たちにとって最大の祝福とする神の御心なのです。

もし私たちが神の道に従うなら、他者に神の御言葉を宣べ伝えるとき、それが空しく神のもとへ戻ることはない、と確信できます。たとえ話にもあるように、私たちが蒔く種のかかなりの部分は道端に落ちてしまいます。つまり、人々は私たちが語ることを理解しないのです。それでもなお、私たちは祝福を受けます。他者に真理を伝えることによって、それは私たち自身の生活においてより力強いものとなるのです。「イエスの証し」として福音を宣べ伝えるという主の指示を含め、御言葉に従うことによって、私たちはキリストと共に生き、支配する準備が整えられるのです。ヨハネの黙示録 20:4

私たちが真理の種を蒔くとき、その一部は岩だらけの地に落ちます。このたとえば、御言葉を喜びをもって聞くものの、それを支持することから生じる敵意や迫害に耐えられない人々を表している。彼らは、たとえ一時的であっても、真理から喜

びを受け取り、それは彼らにとって祝福である。彼らは現世において心を完全に主に捧げる準備はできていないが、喜びをもってそれを思い出し、来たるべき時代には「聖なる道」に入る準備が整うだろう。イザヤ書 35:8

また、真理の御言葉を聞き、それに喜び、しばらくの間は前進するものの、この世の心配事や富の欺きによって、自分の霊的な命が窒息してしまうことを許してしまう人々もいます。彼らが人生の状況に、御言葉の聖なる影響力を取って代わらせてしまうまでは、御言葉は彼らの心の中で非常に力強く働いていました。神の御言葉は確かに力強いものですが、神はそれを使って民の心を強要されることはありません。御言葉を受け入れる者たちの自由意志の行使を通じて、主は彼らに対する忠実さ、そして義の律法への忠実さを試されるのです。

最後に、「良い土」に真理が落ちた御言葉の聞き手たちがいます。彼らはメッセージに応答するだけでなく、霊的な成長を続け、「忍耐をもって」実を結んでいます。（ルカによる福音書8:15）彼らの成長と実り————は、神の御言葉を日々実践するかにかかっています。したがって、奉獻された者たちの心、思い、言葉、そして行いにおけるこの日々の実りをもたらす働きもまた、神の口から発せられる御言葉によって成し遂げられるのです。

真理を自分だけのものにしておきながら、そこに含まれる豊かな恵みをすべて受け取れるなどとは期待できません。私たちは、他者と御言葉を分か

ち合う中で、その御言葉によって養われます。他者に「水を注ぐ」ように努める中で、御言葉によって活力を与えられます。互いに「愛と善行」を励まし合うとき、私たち自身の生活における真理の清めの力は、より効果的に働きます。（ヘブライ人への手紙 10:24）。「かつて聖徒たちに伝えられた信仰」のために共に「熱心に戦って」いくとき、新しい被造物に対する様々な敵の攻撃から真理を守る力は、大いに強められるのです。ユダの手紙 1:3

「説教の愚かさ」

パウロは、「宣教の愚かさ」によって成し遂げられる神の御業について語っています。（コリントの信徒への手紙一 1:21）この宣教は、演壇からの説教に限定されるものではない。神に奉獻されたすべての忠実な子らは、自らの唇や生活から御言葉が輝き出ることを許す限り、その宣教に参加している。人間の視点から見れば、これほど力強い業が、一見すると全く効果のないような方法で成し遂げられるなど、愚かに思えるかもしれない。それが可能である理由は、神が「成長」を与えてくださるからである。コリントの信徒への手紙一 3:6

御国を備えるための神の御業は、イザヤ書51章16節に象徴的に記されています。「わたしは天を植え、地の基を据える。」ここで言及されている「地の基」とは、復活した古の義人たちの指導の下にある、キリストの御国の地上的段階のことです。彼らは、過去の時代に彼らに明らかにされた神の御言葉への従順を通じて、この栄誉ある地位に

備えられてきました。「天」は、イエスとその教会から成る、御国の霊的な段階を象徴しています。ペンテコステ以来、彼らもまた、御言葉を通して示された神の御心への従順によって、栄光の地位に備えられてきました。

イエスは御父への献身の中で、こう言われました。「見よ、わたしは来る（書物の巻に、わたしについて書かれているとおり）。神よ、あなたの御心を行うために。」（ヘブル人への手紙 10:7；詩編 40:7）。この契約に対するイエスの忠実さこそが、彼を「王の王、主の主」となる資格を与えたのです。このように、預言者たちによって記録された神の御言葉こそが、主を備え、聖別し、「神の右の座」（コロサイ人への手紙 3:1；ヘブライ人への手紙 12:2）に就く、聖なる栄誉ある地位のために、主を特別に選び分けたのです。イエスは弟子たちのために、「あなたの真理によって彼らを聖別してください」と祈り、さらに「あなたの御言葉こそが真理です」と付け加えました。（ヨハネによる福音書 17:17）

真理の御言葉が、新しい天を築くというこの神聖な目的を果たすためには、献身的な民の間で互いに伝えられなければなりません。神は、誰もが読めるように空にそれを掲げたりはしません。神は御霊の力によって、預言者たち、イエス、そして使徒たちにそれを与えられ、私たちは彼らからそれを受け継ぎ、互いに伝え続けているのです。これが主の定めであるからこそ、預言者を通して主が「わたしはわたしの言葉をあなたの口に置き、わたしの手の陰であなたを覆った。それは、天を

植え、地の基礎を据え、シオンに『あなたはわたしの民である』と言うためである」と語られたとき、私たちはその言葉の真の重みを理解できるのです。イザヤ書51:16

私たちもまた、心に御言葉を持たなければなりません、それを心に隠しておいてはなりません。もしそれが私たちの生活において真に効果を発揮するならば、それは私たちの唇にもあるべきです。イエス様もそうでした。預言的に、イエス様は次のように語られたと記されています。「わたしは大きな会衆の中で義を宣べ伝えた。見よ、わたしは唇を閉ざさなかった。主よ、あなたはご存じです。わたしはあなたの義を心に隠さず、あなたの真実と救いを告げ知らせました。大いなる会衆の前で、あなたの慈しみと真実を隠しませんでした。」詩編40:9,10

神が「空しく私のもとに戻ることはない」と宣言される御言葉が、私たちを通して伝えられること、そして、御霊の油注ぎによって与えられた使命に忠実であれば、実際にそうなるのだと悟ることは、謙虚な思いにさせられます。たとえ私たちの努力が微力であり、たどたどしい言葉で語ったとしても、御言葉が主の御心を成し遂げてくださることを知ることは、なんと心強いことでしょう。イザヤ書28:11

まもなく、この時代の働きは成功裏に完了することになるでしょう。今この時点では、この愛の働きにおいて私たちの役割が具体的にどのような成果をもたらしたのか、はっきりと見極めることはできないかもしれません。しかし、幕の向こう側

で、私たちの不完全な口から語られた神の御言葉が、全体的な努力の一端を担っていたこと、また、私たちの神を賛美するために語った言葉が、神によって祝福され、狭い道を進む他の人々を強め、彼らの霊的生活を豊かにするために用いられていたことを、私たちは知るようになるでしょう。

その同じ御言葉は、教会の集めと建て上げのために伝えられる一方で、世に対する証しとしても機能してきました（マタイによる福音書**24:14**）。このようにして、御言葉は神の御心をも成し遂げるのです。 私たちは時に、自分の努力が無駄だと感じるかもしれませんが、それは単に、主の道が私たちの道よりも高く、主の思いが私たちの思いよりも高いということを、常に自覚していないからに過ぎません。（イザヤ書**55:8,9**）。 私たちによって、また神の権威によって宣べ伝えられる神の御言葉は、私たちが望むような結果を必ずしももたらさないかもしれませんが、神の御心にかなうことは必ず成し遂げられると確信してよいのです。このことに私たちは喜びを見出すことができます。この確信に基づき、ますます自己を空にし、神の御言葉で満たされるよう努めましょう。その御言葉が私たちを満ち溢れさせ、他者の祝福と神の栄光のために、私たちの心と口からあふれ出るようにしましょう。